農耕開始期の居住システムと住居構造
—中部高地・関東を中心に—

小　林　青　樹

はじめに
Ⅰ．群馬県西部地域における初期弥生集落
Ⅱ．居住システムの問題
Ⅲ．住居構造の系譜問題
おわりに

はじめに

上手沢遺跡で検出された弥生時代前期の住居は、初期農耕社会の成立過程を住居から考えていく上で重要な情報を提供する。現状では、住居に関する情報はあまりにも不足しているが、東日本における農耕社会の開始期における集落と住居の実態は最も重要な課題であろう。

現在、筆者が調査研究を行っている群馬県西部地域では、弥生時代前期から中期中葉にかけての集落が相次いで検出されており、集落の様相や住居等の居住の実態に関して比較的良好な情報を提供している。該期の一つのモデルとして基礎的情報の提示を行い、比較検討の材料にしたい。

ところで、近年新潟県を中心として、縄文時代晩期において、竪穴住居が主体とならない居住システムの実態が明らかになり、特に農耕開始期を考える上で重要な浮線文期の様相が見えてきた。こうした居住システムの実態は、当然、住居構造等にも関わるのであり、この問題についても触れておく必要があろう。こうした東日本の弥生住居の系譜に関しては問題提起（岩瀬2001他）がなされている。該期における住居構造の系譜問題については、上手沢遺跡例をはじめとする諸例の検討から見直し、現状での評価を与えたい。[1]

Ⅰ．群馬県西部地域における初期弥生集落

(1) 初期弥生集落の概要

縄文時代における居住システムが、弥生時代前期段階にどのように展開するのか。集落の様相を把握することが可能な、群馬県西部地域の事例について概観する。

①注連引原Ⅱ遺跡第１地点の調査

群馬県安中市注連引原遺跡群が所在する台地上は、縄文時代晩期終末から弥生時代中期前半の遺跡が多数存在する特殊な地域である。数々の火山灰降下を経験し、かつ古代以降の牧の経営により開発が進まなかったためであろうか、遺構の残存状況が比較的良好で、異なる時期の建物遺構が重なっておらず、遺構の時期が限定でき、集落の様相をつかみ易い。

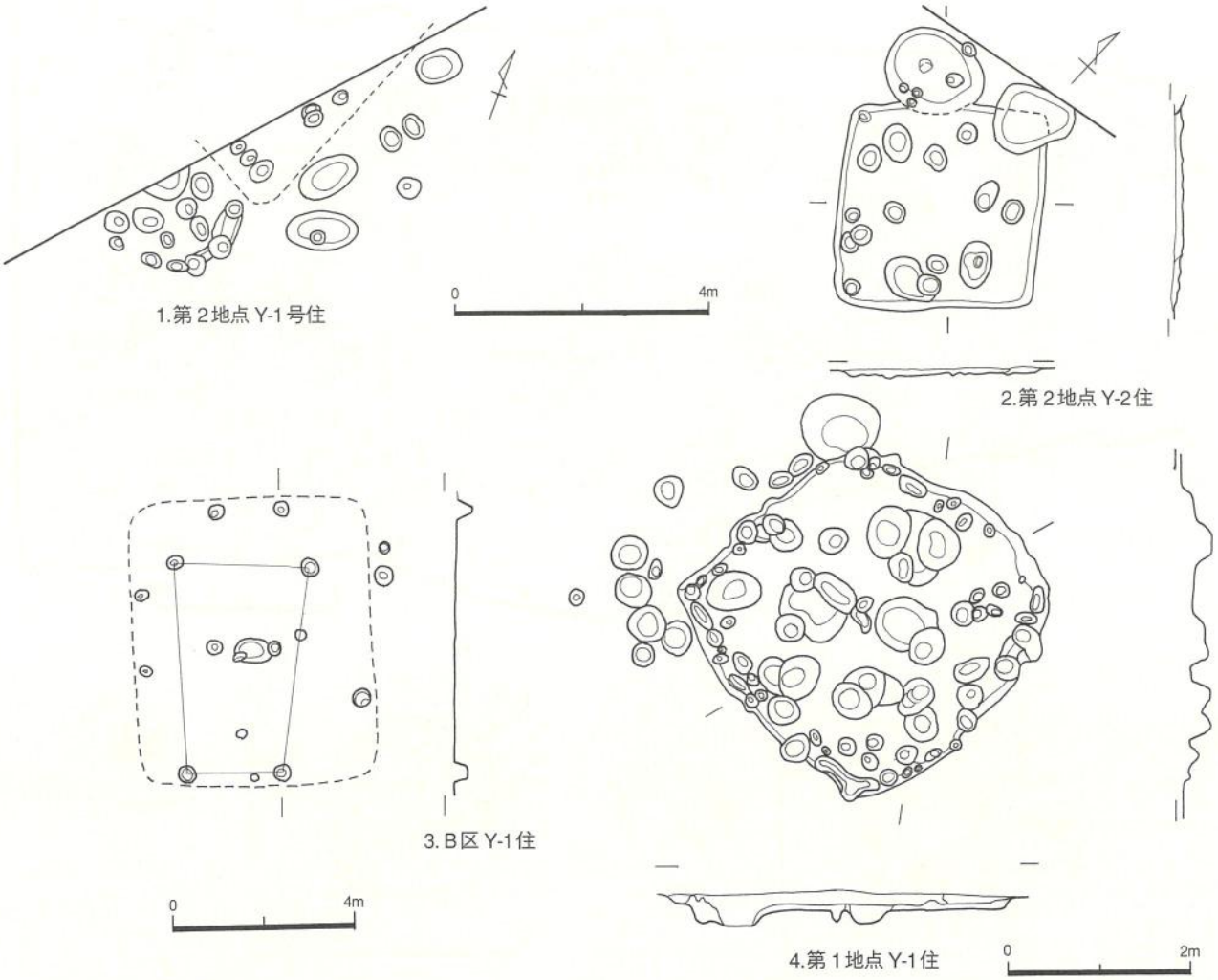
1986年に注連引原Ⅱ遺跡が安中市教育委員会により調査され、弥生時代前期末の住居１軒・土坑23基・ピット多数が検出された（大工原1987）・（図１・２）。便宜的にこの地点を第１地点とする。

Ｙ－１号住居は、１辺3.5mの不整方形プランで、南西隅に偏った位置に炉を設けている（図２－４）。掘込み深度は約20cmでかなり浅い。壁際の柱穴と規模の小ささから壁立構造の可能性が指摘されている（若狭2001）。なお、土坑のなかには壷棺再葬墓と思われるものが２基含まれている。この遺跡については、当初、集落内に同時期の環濠が想定されていたが、その後の調査で奈良・平安時代の「牧」の区画溝であることが判明している。なお、注連引原Ⅱ遺跡の東側に所在する地点（ローマ数字を付さない「注連引原遺跡」）が、1984年～1985年に調査され、Ｂ区から掘り込みの浅い住居が１軒検出されている（大工原1987）・（図２－３）。住居形態は隅丸方形に復元されている。置き石をもつ炉を中央に設置し、その両脇に小形の柱穴をもつ。壁際にいくつか柱穴をもつが、主柱穴配置は台形プランに復元する。

②注連引原Ⅱ遺跡第２地点の調査

2000年8月と2001年８月に、注連引原Ⅱ遺跡前面

第１図　注連引原Ⅱ遺跡全体図（トーン部分は古墳の周溝）



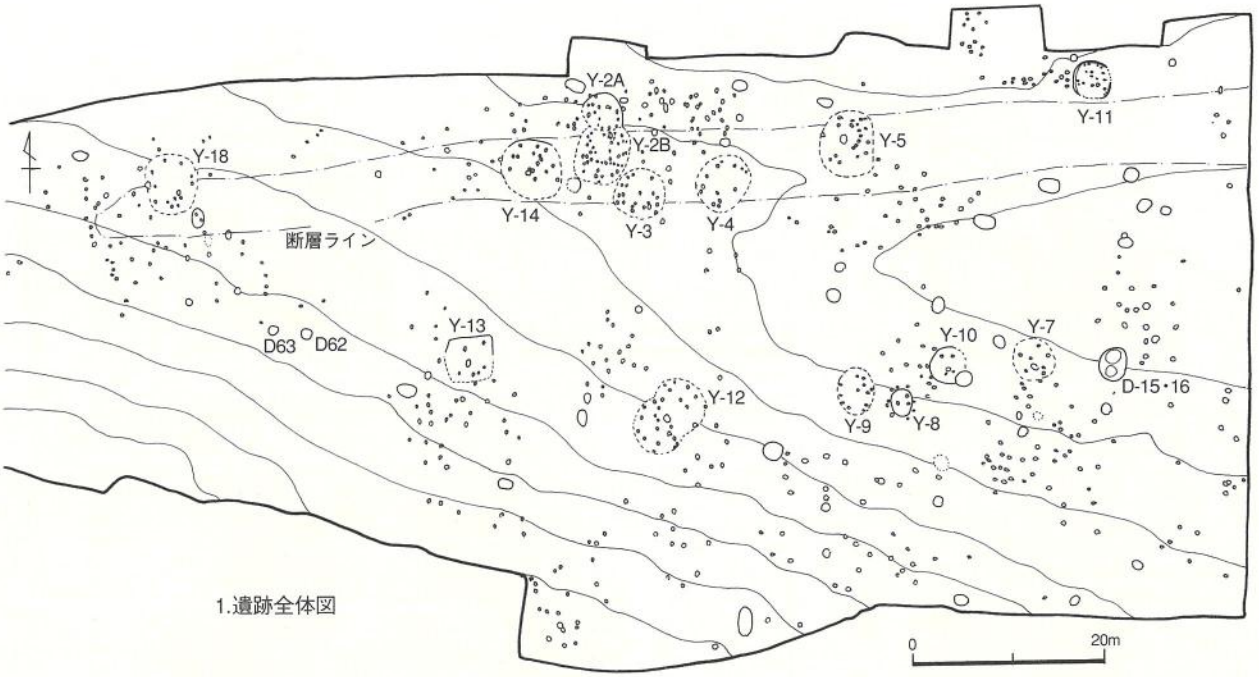
第２図　注連引原Ⅱ遺跡の住居

の台地を通過する道路工事に伴う調査が行われた。後述する大上遺跡も本事業にかかる一地点である。第２地点は、かつての注連引原Ⅱ遺跡のすぐ南西に隣接し、調査主体の安中市教育委員会と國學院大學栃木短期大学が共同で調査をおこなった（井上・小林2003）。さらに2002年には、國學院大學栃木短期大学が調査主体となって隣接地点（第３地点）を学術調査した[2]。当初調査予定地点は墓域であると予想された（大工原・若狭2002）が、掘り込みの浅い住居２軒・土坑13基、ピット多数を検出した。検出された遺構はいずれも弥生時代前期が中心であり、再葬墓は存在していなかった。

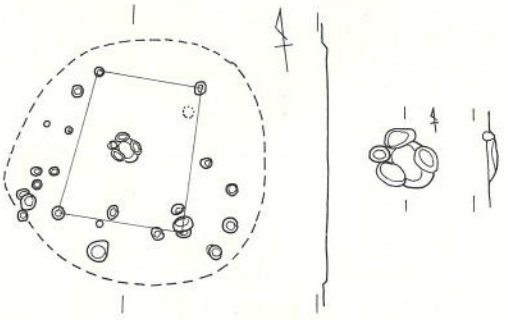
Ｙ－２号住居址は、調査区北西において農免道路に一部がかかって検出された（図２－１）。ピットの分布範囲によって住居状の遺構と判断したが、掘り込みや炉の存在を確認できなかったため、本遺構の性格は不明である。次にＹ－３号住居址は、Ｙ－２号住居からやや離れて古墳時代前期の円形周溝墓の中央付近に位置する（図２－２）。方形状プランを呈する。ピットの深さは浅く、配置も不規則であり、炉についても焼土が散布する範囲を確認できる程度である。

土坑については、軸方向がほぼ同じ楕円形のものが２列に並ぶ箇所があり、これらについては、土壙墓の可能性も考えられる。その他のやや大形の土坑は貯蔵穴であろう。

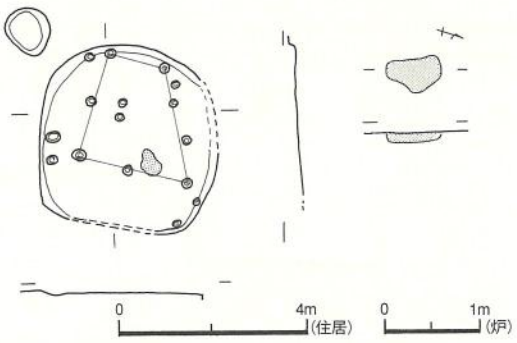
注連引原Ⅱ遺跡の遺構の時期については、覆土中に、沖式直後段階（Ⅰ期前半）の土器片がごく少量混入しているものがあるので、これを指標とすれば沖式段階にほぼ併行すると考えることができる。しかし、出土遺物には後続する時期の土器が数型式含まれており、遺構の主体は沖式段階で比較的短期間



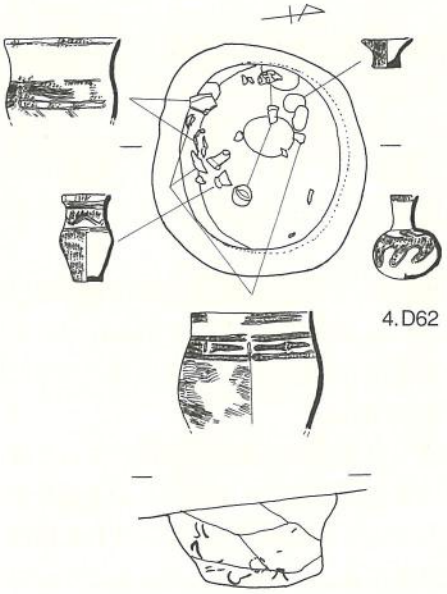
1.遺跡全体図



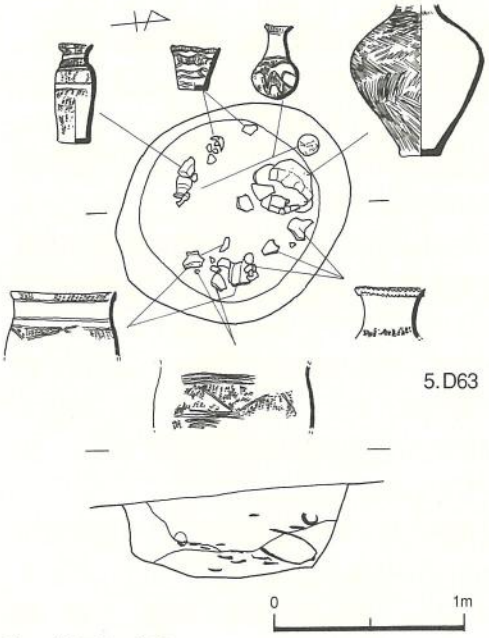
2.Y-3住



3.Y-11住

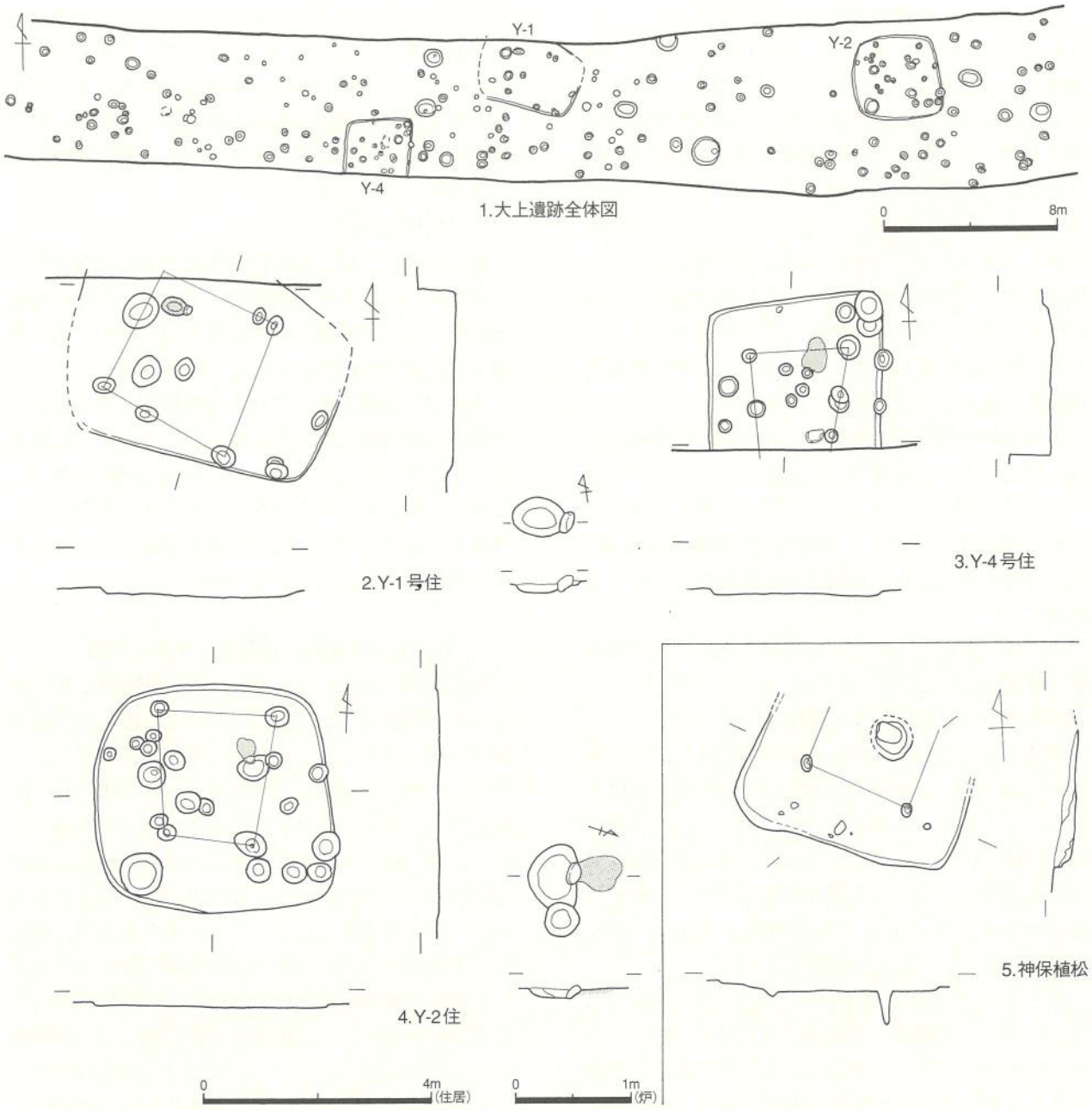


4.D62



5.D63

第３図　中野谷原遺跡の住居と土坑



第４図　大上遺跡（1～4）・神保植松遺跡の住居（5）

の居住で廃絶され、その後、廃絶期間を経て同一地点に再び一定期間の居住をみたと考える。遺跡の範囲については、2002年度に行った東側の調査において、ピットなどの遺構密度が希薄であることが明らかになり、沖式段階の集落は第２地点よりも東側には展開しないことが判明している。

次に掘立柱建物についても触れておこう。図１下段の第２地点東側のピットの密集地点では、ピットの深度により柱穴として相応しいものを区別しながら、掘立柱建物のプランを想定した。その結果、１間×１間の小形の柱穴配置のものと、１間×２間の多角形配置の２者が想定できる。これらの建物は、南西側の土坑群の脇に重複しつつ連なる様相を示している。こうした配置状況からみると、第１地点のＹ－１号住居の南西側に弧状に連なるピットと土坑のまとまりは、掘立柱建物と土坑からなる可能性があろう。なお、ここでは掘立柱建物としたが、建物としては平地式建物であると推定する。この点については後述したい。

③中野谷原遺跡

1999年に安中市教育委員会により調査され、A区において弥生時代中期前葉の住居14軒、再葬墓関連遺構2基等が検出されている（井上2001）（図3－1）。遺跡の時期は、Ⅱ期を中心とし、Ⅲ期前半を含むと考える。住居は、いずれも掘込みが浅く、炉を中心に柱穴配置から全形を復元しており、平面プランについては不明確である（図3－2）。本報告がまだであるので、詳細については不明であるが、[3]残存状況の比較的良好なY－11号住居を見ると、柱穴位置は台形に復元が可能で、炉は住居の中央よりややはずれた位置にある。したがって、炉を挟む対称構造に復元が可能であろう（図3－3）。

再葬墓に関連すると考えられる土坑（D62・D63）は、住居（Y－16号住居）に近接し、2基でかたまっている（図3－4・5）。この土坑内からは大形土器片が出土しており、完形に近い個体もあるが、完全な再葬墓ではない可能性が指摘されている（若狭2001）。

その他、貯蔵用と思われる大形土坑が、各住居の脇に位置している。

④大上原地区遺跡群大上遺跡

注連引原Ⅱ遺跡の約500m東側に位置し、中期前半の住居4軒、土坑多数、埋設土器棺が1基検出されている（井上・小林2003）・（図4－1）。埋設土器棺は、住居（Y－2）内に1基あり、再葬墓の可能性もある。時期はⅠ期後半を含むが、Ⅱ期からⅢ期前半が主体である（井上2002）。住居は、Y－3号住居を除いて状況を把握できる。

Y－1号住居は、調査区のほぼ中央に位置する（図4－2）。北側が一部調査区外となる。掘り込みが浅いため、プランは明確ではなかったが、確認面よりやや低いところで炉址が検出された。隅丸長方形であると推定される。柱穴の配置は不規則に見えるが、柱穴位置は深めのピットを指標に方形に復元する。

Y－2号住居は、平面が円形に近い隅丸方形を呈する。掘り込みが浅いため、隅が角かどうかは不明確である（図4－4）。中央部には炉址が存在し、柱穴と考えられる浅い小穴が不規則に並ぶ。炉は地床炉で、枕石が置かれていた。この住居址の南西には、覆土から掘り込みが確認された土坑が検出された。柱穴配置については、柱穴の深度と炉との位置関係から台形もしくは方形に復元した。

Y－4号住居は、他の住居に比べ、掘り込みが明確に確認できた住居である（図4－3）。平面は隅丸方形である。掘り込みは深く、覆土中から多数の遺物が出土し、柱穴が数カ所確認された。また地床炉と考えられる焼土の範囲が確認されている。柱穴位置は、中央付近にまとまるものを基準に台形もしくは方形に復元した。

⑤神保植松遺跡

吉井町周辺では、関越自動車道関連の調査で弥生時代初頭の遺跡が多数検出されており、特に神保植松遺跡からは中野谷原遺跡とほぼ同時期のⅡ期に相当する住居が検出されている（谷藤1997）。

神保植松遺跡で検出された遺構は、住居3軒とフラスコ状を含む土坑77基である。これらは、住居1軒と土坑群がセットとなって、3群に分離していた。住居は、残存状況のよいもので見ると、方形ないしは隅丸長方形を呈し、柱穴配置は方形、または長方形の対称構造に復元できる（図4－5）。

(2) 群馬県西部地域の初期弥生集落の特徴

居住遺構については、基本的に注連引原Ⅱ遺跡（Ⅰ期）の段階では、掘り込みの浅い住居と平地式建物の組み合わせで構成される。住居は方形プランを呈し、掘込みは浅く、柱穴配置も不規則である。厳密には、竪穴住居というよりは、地面を整地する時に、少し掘りくぼめた程度である。平地式建物としているものについては、柱穴のみが検出されるために、掘立柱建物として一括されてしまうが、縄文時代晩期後半の青田遺跡（荒川2000）等のような平地式建物の構造を想定しておく。この段階の集落は、出土遺物が少なく、短期的な居住に適した住居構造をもち、相対的に移動性に富んでいた可能性が高い。

以上に対して、次の中野谷原遺跡段階（Ⅱ期からⅢ期前半）になると、住居の数が急激に増加する。しかし、このような増加傾向は必ずしも普遍的ではなかったようであり、大上遺跡や神保植松遺跡のように数軒で構成される小規模な集落も存在しており、現段階ではすでに当地域においてⅡ期段階から集住化傾向が強く住居数が多い集落と、Ⅰ期段階から続く数軒からなる小規模集落という二つのケースが存在していたことは認めてよいであろう。

住居構造については、まず平面形でみると、注連引原Ⅱ遺跡段階では隅丸方形が主体であり、中野谷原遺跡では形状の把握が困難であるが、神保植松遺跡では隅丸方形が存在し、次の大上遺跡段階では方

形が主流となるようである。したがって、前期段階から中期前半段階まで、方形、隅丸方形プランの伝統が続いている。また柱穴配置でみた場合、注連引原Ⅱ遺跡では不明確であるが、Ⅱ期段階が主体の中野谷原遺跡と神保植松遺跡において、明確に炉を挟んだ対称構造となるタイプが成立している点に注目しておこう。

立地については、安中市周辺における該期の遺跡は、現在の発見例だけでみれば上位段丘上に位置する。地形的には、谷への落ち際で台地の縁辺側に立地する傾向が指摘できる。

以上のような群馬県西部での様相を踏まえ、農耕開始期における居住システムと住居構造の問題について検討することにしたい。検討に際し、縄文時代晩期にまで遡ってみることにする。

Ⅱ．居住システムの問題

(1) 縄文時代後晩期の平地式建物

縄文時代の後晩期に増加する住居遺構は、掘立柱建物であり、長方形の柱配置で、六角形の平面形のものが多い。こうした建物については、高床式を想定するのが一般的であったが、そうでもないらしい。近年では、新潟県津南町上原Ａ遺跡（津南町2000）のように、炉をもつ例が見つかっており、武藤康弘は、北米西海岸先住民のプランクハウスとの比較から、こうした建物を平地式建物と考えている（武藤2001）。このような例は、晩期後半の浮線文段階である新潟県青田遺跡でも確認されており、後晩期を通じて平地式建物が広く存在していた可能性が明らかになった（荒川2000）。縄文時代晩期は、地域的な特性はあるものの、平地式建物と竪穴建物の両者が併存するという、複雑な居住システムが存続していた時期と考えることができる（武藤2001）。

この種の建物は、柱穴配置などに差異はあるものの、弥生時代前期段階の注連引原Ⅱ遺跡でも、先述のように抽出できる（図１下段）。縄文時代晩期における平地式建物の一つの系統が、弥生時代にも確実に継承されていることがわかる。なお、柱穴配置に注目すれば、特に多角形配置の建物も存在しており、南関東において弥生時代中期以降に問題となっているこの種の建物の系譜に繋がるものと考えてよいかもしれない（及川2001）。その他、独立棟持柱付建物に関する問題については、別稿に譲る。

(2) 竪穴住居の平地式建物化

縄文時代晩期の居住システムが、掘立柱による平地建物主体であったとしても、竪穴住居が全く皆無であったわけではない。しかし、竪穴住居の候補は、類例を弥生時代前期に広げて見ても、その掘込み深度は極めて浅い。これに関しては、及川良彦も同様な問題提起をおこなっている（及川2001）。調査時に、住居の検出が難しく壁を削平してしまったのではなく、意図的に床面の深度が浅くなっている可能性がある。筆者は、床面を平坦化するために、わずかに地面に手を加えただけの構造であると推測する。むしろ、わずかでも掘込みが残る方が稀で、ほとんどは整地程度であっただろう。竪穴住居とは、地面を掘り窪めたものであるが、床面の深度に大きく分けて「深床」と「浅床」の二者を認めて区別し、ここで問題とする住居構造を「浅床住居」とする。また、このような床面構造をもつ建物の上屋構造は、平地式の可能性が高い。該期には、先に見た掘立柱による平地式建物の他に、竪穴住居が平地式建物化したものが存在していた可能性を問題提起したい。

このように竪穴住居の構造が不明確になった理由として、おそらく居住期間の縮小に伴い、移動性を高めたために住居構造の不安定さにつながった可能性をまず考えておく。平地式建物化により、竪穴掘削にかかる労力の軽減をはかったのであろう。その結果、居住の痕跡が極めて残りにくい状況を呈すことになったと考える。ただし、こうした機能的側面の理解だけでなく、「平地式建物」の型自体が、当時の社会にとって象徴的なアイデンティテイを形成していた可能性も想定しておくことにしたい。

(3) 浮線文期の居住システム

縄文時代晩期において、関東地方を中心にして考えた場合、その前半期である、安行３ｂ式期頃までは集落構造をつかむことは難しくない。しかし、安行３ｃ式期以降になると明確な住居をもつ集落数は極端に減少し、浮線文段階にいたっては、明確な住居をもつ集落はほとんど見つかっていない。この要因としては、遺跡の立地の分化が考えられており、佐藤庄一は東北地方に関し、大洞C_2式段階から大洞Ａ式段階に、低地化する遺跡と高地化する遺跡に分かれてくることを指摘している（佐藤1996）。さらに武藤康弘は、佐藤の考えを受け、遺跡立地における二極化によって、見かけ上の遺跡数が激減している可能性があると指摘している（武藤2001）。

一方、こうした居住システムの特異性に対し、違った見方もある。浮線文期遺跡の分布の分析を行った百瀬長秀は、氷Ⅰ式期から庄の畑期に居住遺跡は多出するが、分散居住が頻発し、存続期間も短命な消長をくり返したと考えた（百瀬 1994）。このような居住システムに転換した背景に関し、百瀬は「広域的祭祀圏の衰弱・消失にみられる伝統的社会体制や価値観の弛緩、遠賀川集団の成立と東方進出およびそれから派生する稲作情報を核とする諸情報の伝達という事態があった」とした。百瀬が指摘するように、晩期中葉には、複数の集落構成員による大規模祭祀的記念物の造営が終わるので、集団間の紐帯を規定していたアイデンティティが変容して分散居住へと変化した可能性は高い。

また、もう一つ別な可能性として分散居住と存続期間の短命さの要因の背景に、生業戦略の変更も考えておきたい。すなわち、浮線文期段階に山野を焼却し、一定期間での移動をくり返す陸耕栽培を開始していた可能性である。後続時期における竪穴住居の斬移的増加傾向と、その結果本格的農耕村落が誕生する状況から推測すると、浮線文期にすでに生業面での農耕への傾斜が始まった可能性がある。いずれの要因を採用するにしても、集落の分散居住と存続期間の短命さ、つまり移動性に富んだ居住システムであったことには変わりはない。

(4) 農耕開始期の居住システムの転換

注連引原Ⅱ遺跡の状況からみる限り、住居の不安定さは、弥生時代前期以降もしばらくは続いたようであり、平地式建物と竪穴住居の両者が併存するという複雑な居住システムを形成していたようである。

前段階である浮線文段階において、立地で低地と高地の２極分化が起こると考えた場合、注連引原遺跡群は高地のタイプに属する。高地であるにもかかわらず、台地上に遺跡群が展開する背景には、陸耕を基本とする農耕が展開し、集落継続期間の短期性から考えて台地上を点々と移動していた可能性が高い。先に浮線文段階における陸耕栽培の開始を想定したが、注連引原Ⅱ遺跡における状況も、その延長線上にあると考えてよいであろう。中部高地でも、ほぼ同時期の五輪堂遺跡（鳥羽嘉彦他 1989）において、小規模な集落が検出されている（図６－１）。この遺跡でも、住居の掘込みは浅く、同一時期の住居は少数であり、類似した居住システムの広がりを考える上で重要であろう。

こうした前期段階における平地式建物と竪穴住居両者の併存と、移動性に富んだ居住システムは、弥生時代中期段階（Ⅱ期段階以降）に、竪穴住居が主体となる集住化の進行した居住システムへと移行する。群馬県西部地域では中野谷原遺跡と神保植松遺跡の段階である。しかし、両遺跡ともに竪穴住居の掘込みはまだ浅く、竪穴住居の平地式建物化したものが想定できる。また両遺跡では、貯蔵穴が多数集落内に併置される状況がみられ、こうした面からもある程度の集落の固定化傾向を推測可能であろう。しかし、この段階はまだ本格的な水耕農耕の開始段階ではなく、水系単位での協業を前提とした集団の集住などは達成されていない。したがって、集落の規模は、中野谷原遺跡程度が限度で、まだ小さいものであったと考えておきたい。

Ⅲ．住居構造の系譜問題

(1) 浮線文期から弥生時代中期初頭の住居例

居住システムの問題で検討したように、浮線文期から弥生時代前期にかけての住居は、掘込み深度が浅く、平地式建物化していた可能性を考えた。こうした竪穴住居系の建物は、弥生時代前期から中期にかけて、再び掘込み深度が深くなり、中期後半以降には明確な竪穴住居として数も増加する。この段階に中部高地と関東における弥生住居が成立するわけであるが、この住居構造の系譜に関しては諸説あり、検討すべき重要な課題である。以下では、この問題について、浮線文段階から中期中葉段階までの住居遺構の類例を概観し、問題点を抽出することにしたい。

①浮線文期（Ⅰ期前半）

浮線文期の住居の例としては、新潟県・福島県で比較的多数が検出されている（荒川・宮内 2001）。両県の特徴は、晩期中葉以降から平面プランは円形もしくは楕円形を呈し、炉が中央に位置する。炉は、石囲い炉が多い。柱穴配置は、炉を中心に４本主柱穴タイプや、炉を取り囲む球心状のものなどがある。栃木県においても、楕円形プランの住居が主体である。

群馬県では、浮線文段階の資料は激減し、桐生市千網谷戸遺跡などしかない（伊藤・増田他 1988）。千網谷戸遺跡では、平面形は方形プランを呈し、壁際に周溝をもつ（図５－１）。炉は石囲い炉であり、

住居の中央よりもややずれた位置にある。柱穴配置は、炉を挟んで対称構造をなす。この構造は晩期中葉でも同じである。この住居で注目されるのは、晩期中葉の大洞C_2式段階の住居に、複数回にわたり住居が重複して構築されていることである。当地域では、晩期前半から、こうした住居の重複が顕著であり、この伝統が晩期後半にまで継承されている（石坂・大工原 2002）。住居構造から構築法にいたる、伝統的つながりの強さを認めることができる。しかし、千網谷戸遺跡例のように、明確に掘込みをもつ住居は稀であることは注意を要する。なお、群馬県では、千網谷戸遺跡例のような方形住居プランは、晩期前半でも主体であり（宮本 1998）、大洞C_2式段階でも方形プランが主体である（石野 1975）。こうした伝統が基本的に晩期後半にも影響していると考えた方がよいであろう。

次に、中部高地では、山梨県金生遺跡、長野県トチガ原遺跡・荒神沢遺跡・鶴前遺跡等、でわずかながら住居例が知られている。

駒ヶ根市荒神沢遺跡例は、比較的集落の状況が分かる例である（駒ヶ根市教委 1979）。この遺跡からは、住居１軒、炉跡１基、土坑262基が検出されている（図５－４）[4]。多数のピットの存在は、他にも住居が存在していた可能性を示している。住居は、南側に張り出しをもつ特殊なプランを呈し、東西３m、南北推定2.8mである。壁高は約10cmから20cmと浅めである。突出部を除けば、本体は隅丸方形もしくは楕円形を呈するものと思われる。やや大形の配石炉をもつ（図５－２）。柱穴は、壁際の３か所が確実とされ、隅の柱穴を加えると台形の柱穴配置に復元できる。平面プランについては、突出部を除くと方形に復元できる。しかし、これについては問題も残る。

長野市鶴前遺跡例は、大半を後出の遺構に切られており、全形は不明である（図５－３）。残存部分の推定では、平面形状は長方形であり、現状で東西3.94m、北東2.4mである。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は約12cmと浅い。柱穴は１つのみ南側で見つかっている。

その他、本段階である大町市トチガ原遺跡例は、住居を完掘しておらず詳細は不明である。

次に、類例は極めて少ないが、掘立柱の平地式建物例に関して触れておきたい。この種の建物については、千葉県四街道市御山遺跡・三宅村島下遺跡等が知られる。このうち千葉県御山遺跡例は、多数のピット群から掘立柱建物の柱穴配置の復元がなされている（渡辺他 1989・及川 2002）。建物の柱穴配置は、10数個の柱穴が約５m規模の五角形状のプランを形成する。この他、直線状の柱穴列もみられ、数棟の建物の存在が想定されている。

②浮線文直後段階～苅谷原・柳坪段階（Ⅰ期後半）

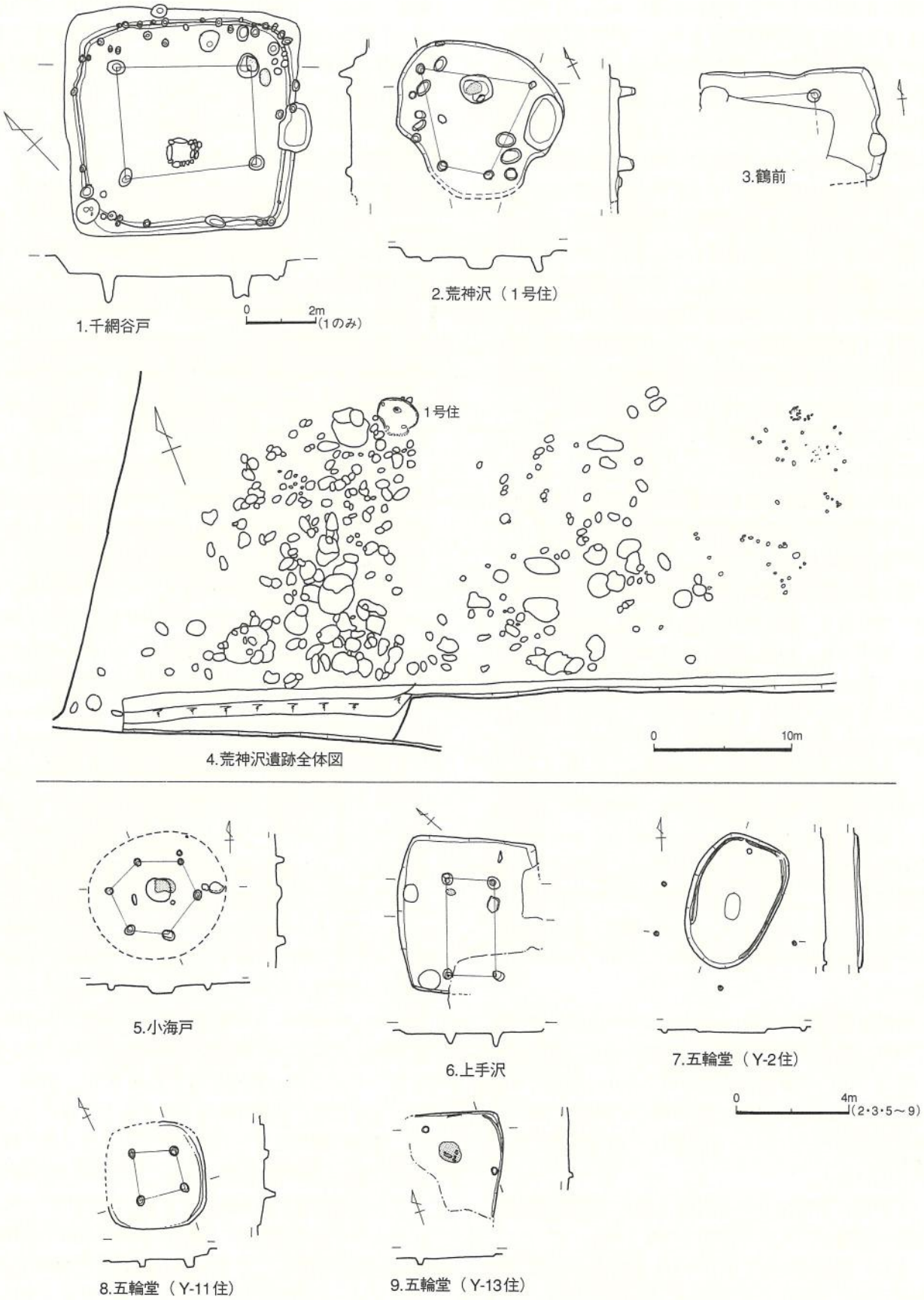
この段階には、住居例が増加する傾向にある。先に触れた、安中市注連引原Ⅱ遺跡例はこの段階に相当する（図２）。

韮崎市上手沢遺跡の住居は、平面プランは隅丸方形を呈し、規模は5.6m×5.2mである[5]（図５－６）。柱穴配置は４本主柱穴の方形をなす。炉は地床炉である。壁は、正確な数値はわからないが、掘込みは深く竪穴住居として構わない。

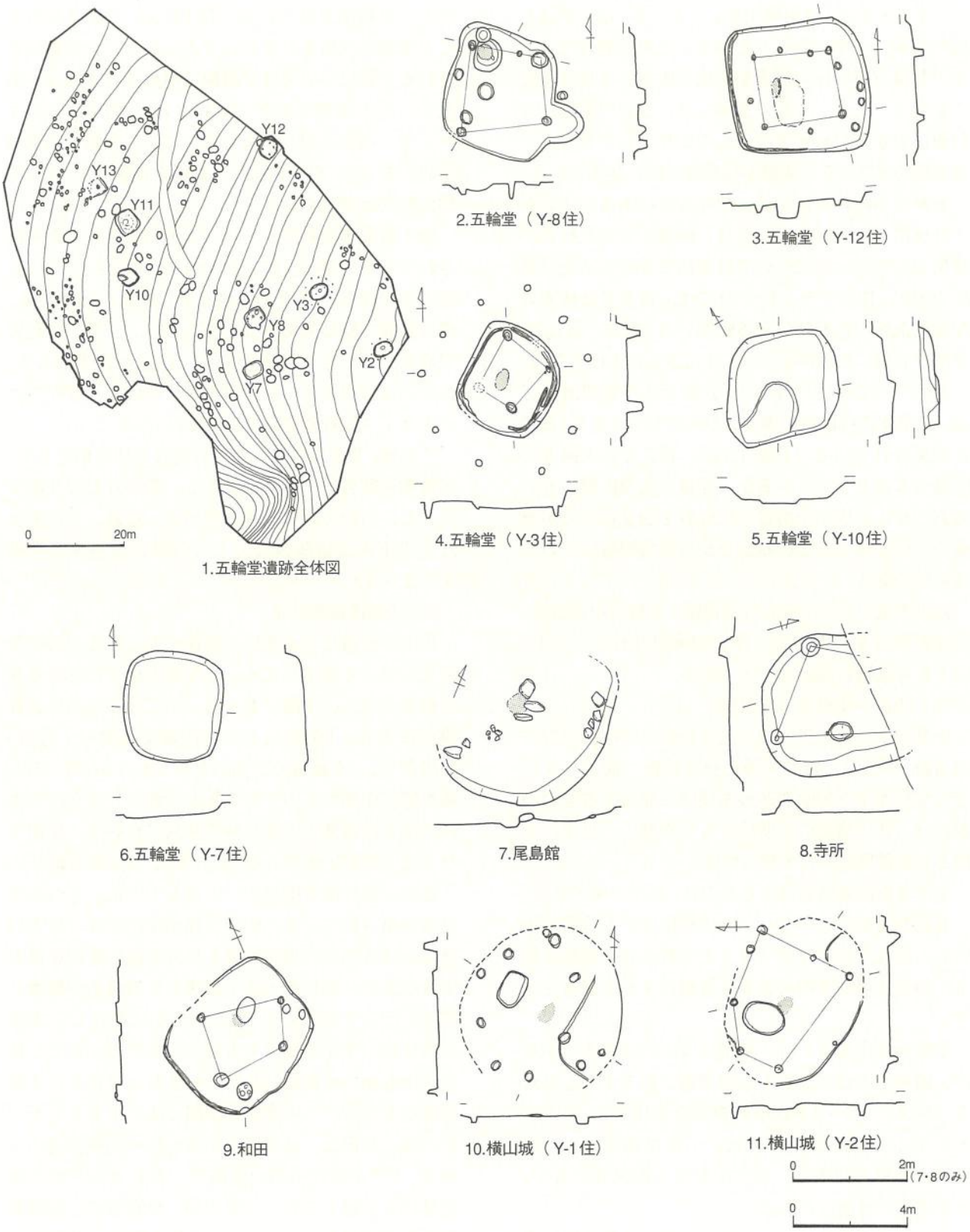
塩尻市五輪堂遺跡は、浮線文直後段階から弥生時代中期前半までの集落である。集落は、緩やかな斜面に位置し、住居８軒、土坑104基（時期のわかるもの）が検出されている（鳥羽 1989）・（図６－１）。住居は、やや環状気味に散在し、この内側はなにもない空間となり、住居群の周りを土坑群が取り囲むように見える。また、土坑群は、各住居に対応するように群集しているようでもある。この土坑群には、いわゆるフラスコ状、袋状を呈するものが含まれる。土坑群のあり方を検討する上で興味深い遺跡である。

住居の平面形は、Ｙ２号住居のみ楕円形の可能性があり、概ね隅丸方形、隅丸長方形を呈する（図５－７～９、図６－１～６）。柱穴配置のわかるものはＹ３・８・11・12号住居である。規模はばらつきがあるが、東西3.4m～東西4.8m、南北3m～南北4.4m、である。壁高は、８～54cm で掘込み深度は浅いものから深いものまで存在し、相対的に深めである。いずれも方形、もしくは台形に復元できると思われ、炉を挟んで対称構造の柱穴配置であったと考える。ただし、Y12号住居の柱穴については、多角形にめぐる球心構造の可能性もある。なお、Ｙ２・３号住居には壁外柱穴がめぐる。床面については、壁際に周溝をもつものがある（Ｙ２・３・11～13号住居）。炉の構造は、Y11・13号住居で石囲炉、Ｙ２・８号住居で掘込み炉、Ｙ３で地床炉をもつ。

以上の住居の時期は、報告による限り出土遺物が少ないので明確にできないが、浮線文直後段階はＹ２・Y11・Y13号住居、Ⅱ期はＹ７・Ｙ８・Y10・Y12号住居、Ⅲ期に下がるものはＹ３号住居と考え



第5図　住居集成（1）〔上段：浮線文期、下段：浮線文直後段階〕



第６図　住居集成（2）〔Ⅱ期～Ⅲ期例〕

る。

五輪堂遺跡例の浮線文直後段階の住居例であるY２・Y11・Y13号住居例（図５－７～９）は、炉は石囲炉が多く、平面隅丸方形プランと対称構造で台形ないしは方形の柱穴配置が明確に成立する点は重要であろう。また、五輪堂遺跡では、住居の掘込みも斜面にもかかわらず深めのものが存在しており、平地建物的構造からの脱却が同時進行的に起きている。

大町市小海戸遺跡では、断片的ではあるが住居が１軒検出されている。住居は、砂層上で炉と柱穴が検出されたが、壁については検出できなかった（篠崎1989）。住居プランについては、報告では柱穴の配置状況から円形に復元されている（図５－５）。中央やや北側に地床炉をもつ。柱穴は６本主柱である。

ここでは図示していないが富士見町籠畑遺跡では、浮線文直後段階の隅丸方形の住居（２号住居跡）が検出されている（武藤1968）。報告では大洞Ａ式段階のものとされているが、浮線文直後段階のものであろう。中央やや南寄りに軽石２個を並べた炉をもつ。貼り床である。残念ながら柱穴配置については不明である。

以上の他、大町市南入日向遺跡、韮崎市中道遺跡、山梨県柳坪遺跡例などで住居が検出されているが、いずれも遺構の詳細は不明である。

③弥生時代中期前半の住居例

中期前半以降の資料は、先に触れた安中市中野谷原遺跡（図３）、吉井町神保植松遺跡（図４－５）、そして松本市五輪堂遺跡の本段階に帰属するものの他には、住居構造の不明確なものが多い。以下、Ⅱ期とⅢ期段階に分けて検討する。

まずⅡ期段階に相当するものは、以下の例である。

五輪堂遺跡については、Y12号住居が本時期に相当し、隅丸方形の住居プランと方形の柱穴配置を備え、炉は住居やや中央よりも外側にずれる構造をなす。

茅野市和田遺跡では、詳細については不明であるが、西地区の12号住居が中期初頭に相当するとされる（図６－９）・（茅野市教育委員会1970）。隅丸方形を呈し、壁高は10cmと浅い。炉は中央からややはずれた位置にある。柱穴配置は不明確であるが、対称構造の可能性がある。

飯田市寺所遺跡では、該期の住居（４号住居）が検出されている（図６－８）・（佐藤1982）。大半を後世の遺構に削られており、構造の詳細については不明であるが、平面形については隅丸方形を呈する。

下伊那郡南信濃村尾之島館遺跡からは、該期の住居が３軒検出されている（伴1974）。２軒はかろうじて床面が検出されたのみであったが、２号住居とされる１軒については、斜面に構築されており、南北で2.6mと小形である（図６－７）。隅丸方形のプランで、中央に配石炉をもち、このすぐ脇に小形の補助炉をもつ。火災住居の可能性が指摘されている。柱穴配置は不明である。

松本市横山城遺跡からは、２軒の該期住居が検出されている（藤沢1971）。いずれも平面プランは、楕円形を呈し、規模は長軸６m、短軸4.5mである。床は軟弱で壁は未確認であるらしい。プランは柱穴配置から推定したようであり、注意が必要である。住居のほぼ中央に炉が位置する。柱穴は、壁際をめぐるタイプで対称構造をなさない。

その他、Ⅲ期段階に下がる可能性の住居例として、五輪堂遺跡のＹ３号住居がある。隅丸方形の住居プランと、台形の柱穴配置を備える。なお、先に触れた安中市大上遺跡例は、この時期に相当する（図４－２～４）。

(2) 住居構造の系譜

以下で検討に入る前に、関連するこれまでの先行研究について見ておこう。まず関東地方における住居構造のうち、平面プランについては、すでに石野博信により、「関東地方の晩期縄文時代の「方型」住居群」という地域型が抽出されており（石野1975）[6]、弥生時代中期でも方型が主体とされる。また、宮本長二郎も関東地方の縄文時代晩期において、平面プランは方形が主体であるとしている（宮本1998）。

また、柱穴配置構造についてもすでにいくつかの見解が出されている。かつて都出比呂志は、日本列島における住居の平面形態と柱穴配置の構造を検討するなかで、東日本の弥生時代の住居構造の特徴と系譜について議論した（都出1985）。都出は、東日本の住居の平面形は隅丸方形と小判形が主流で、柱穴が中心軸の両側に対称的に配された骨格をなす対称構造をなし、この構造は中期に成立するとした[7]。その後、都出は、東日本の中期の柱穴配置構造について、「弥生時代中期の段階で、西日本の主柱を構造材にして建てるという原理が、東日本にも影響を与えたのではないか」とし、「弥生時代中期の段階に西日本で確立し、それが東日本の縄文の伝統のうえに影響を与えてゆくのが、東日本の竪穴ではない

か」としている（都出1998）。また、宮本長二郎は、住居構造において、主柱4本構造の成立は縄文時代後晩期であり、それが弥生時代に引き継がれていると考えた（宮本1998）。都出は、最終的に西日本系の影響を受けるとしながらも、基本的に両氏の議論は、東日本の弥生住居に、縄文の伝統の影響を認めている点で一致している。しかし、こうした先行研究では、縄文時代から弥生時代への連続性への議論にあたって、最も重要な浮線文期から弥生時代中期前半までの様相が資料的制約もあり欠落している。本稿での検討は、まさにこの空白を埋めるものである。少なくとも、今回筆者が検討したような中部・関東という地域を取り上げて、弥生住居の系譜を問題とするならば、前段階の浮線文期の動向が最も重要であろう。

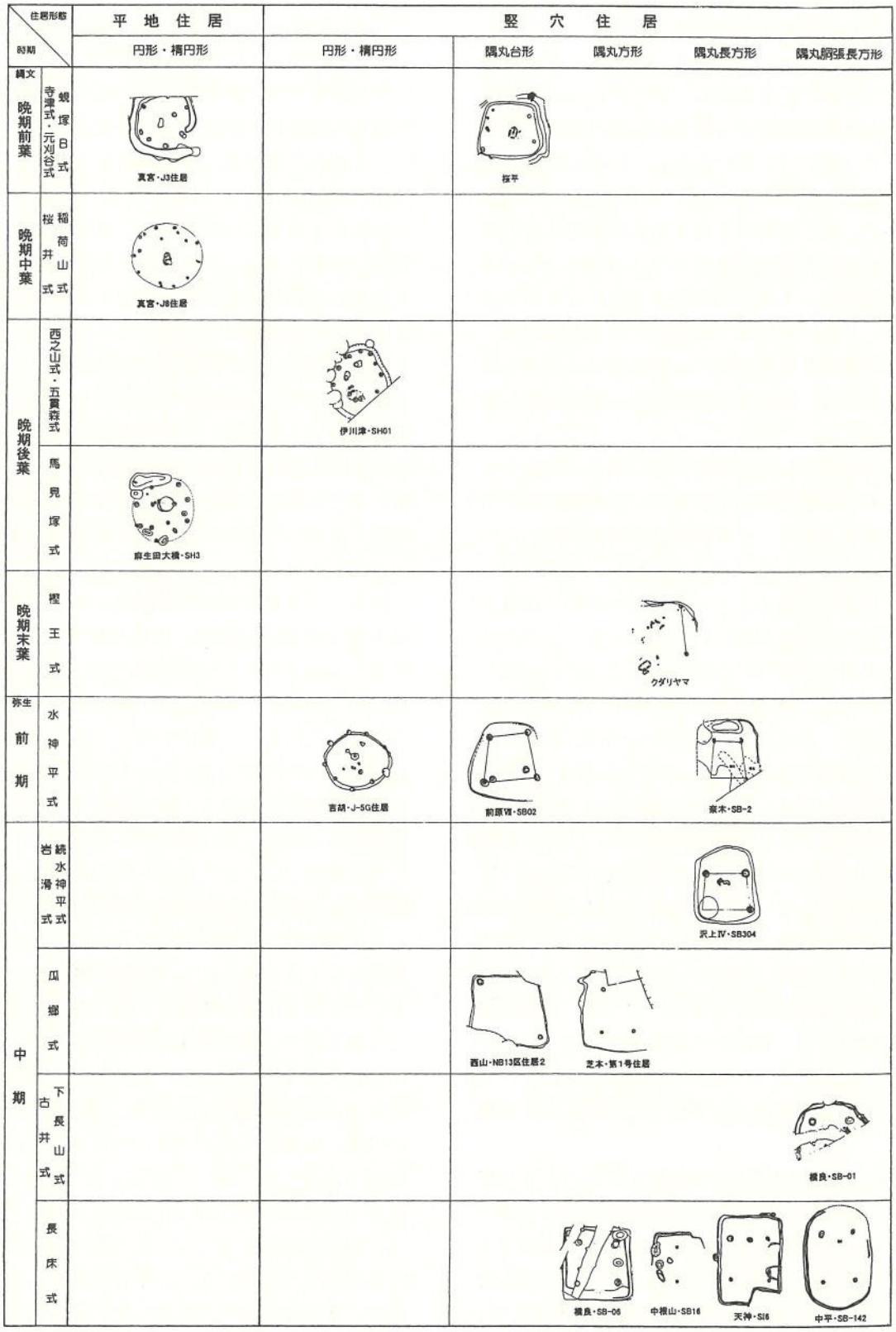
前節までに検討した各段階の住居例は、例数が少ないものの、浮線文期（Ⅰ期前半）から弥生時代中期中葉（Ⅲ期）まで、平面形態と柱穴配置において共通した様相を示している。すなわち、平面形態では方形・長方形を基本とし、コーナーの形状は隅丸が多く、柱穴配置は方形・台形を呈する。この構造は、浮線文期の千網谷戸遺跡例から基本的に変化しないものであり、同時期の中部高地での様相が不明確ではあるが、おそらく北関東から中部高地にかけて同じ住居構造を共有していたようである。また、炉の位置についても、住居の中央部からは外れて、やや外側に位置するという配置状況も、すでに千網谷戸遺跡例段階から見られ、弥生時代中期中葉（Ⅲ期）まで継承されている。以上のように、関東・中部における浮線文系の住居構造の伝統は、弥生時代中期段階にまで継承されているのは明らかである。なお、浮線文系の住居タイプといっても、平面形態には地域性があり、北陸から東北では円形、ないしは楕円形が主体となり、弥生時代前期以降にこうした伝統が各地域の個性を生み出していることを指摘しておく。

基本的に、住居構造の系譜関係を以上のように理解するが、該期の住居構造の系譜問題はそう単純ではない。特に問題となるのは、東海地域との関係である。岩瀬彰利は、東海地方中部を中心に、弥生時代前期から中期前葉、条痕文期の住居を集成して、条痕文期の方形タイプの平面形態と、対称構造の台形をなす柱穴配置とが、中部高地から北関東西部、関東南西部へと影響を与えたと考え、中期中葉以降の関東地方で典型的住居構造となる弥生住居の祖型は、東海地方東部で成立したとする（岩瀬2001）。ここで、比較のためにも岩瀬の検討について整理すると、以下のようになろう（図7）。

東海地方では、晩期前半は在地の円形プランの住居の他、南信州の影響を受け隅丸方形、4主柱穴タイプが現れ、その後、晩期後葉まで平地住居と竪穴住居の両者が共存していた。そして、馬見塚式段階を最後に平地式住居は消滅し、樫王式段階以後は竪穴住居のみとなる。この段階から住居平面形は、隅丸方形、隅丸長方形が普遍化する。縄文系の円形タイプは、次の水神平式段階になくなり、また方形タイプに収斂し、柱穴配置が台形となり、この伝統は中期中葉以降に受け継がれるという。岩瀬の主張のポイントは、都出のいう東日本特有の住居構造である、隅丸方形の平面形と柱穴配置の対称構造の成立が、すでに樫王式段階に東海で達成されているという点にある。このような東海の先進性により、東海から東日本への影響の方向性を述べたわけである。

確かに、浮線文直後段階以後、水神平式併行である五輪堂遺跡の段階に、中部高地での住居構造は、隅丸方形の平面形と柱穴配置の対称構造が明確化する。この時期は、条痕文系土器の東日本への影響が活発化した段階と一致するので、住居構造の変革にも条痕文系が関わっているようにも見える。しかし、岩瀬の資料を見る限り、最も重要な時期である樫王式段階の資料は、柱穴構造の不明確さをもつウダリヤマ遺跡例（図8の5段目）1つと少なく資料的に制約があり厳しいのも事実である。

ここで、以上の問題を考えるために、土器の交流関係に目を向けてみよう。晩期前半段階の交流関係、そして浮線文土器と突帯文土器である馬見塚式、さらに樫王式の関係である。晩期前半から中葉段階は、相互の交流は活発であり、互いの土器様式に影響を与える関係が構築されていた（設楽・小林1993）。その後、五貫森式段階では、突帯文土器の東方への拡散も顕著であった。しかし、馬見塚式になると、東方へは拡散せず、もっぱら浮線文土器が東海地域へ一方的に拡散する。こうした状況が大きく変化するのが樫王式段階であり、東日本各地にその影響が及び、その逆もまた大であった。住居構造における樫王式期での変革は、むしろ浮線文系もしくは前段階の東日本系の住居構造を受容したことによるのであろう。東海において、水神平式段階に類例が増加



第７図　東海における縄文時代晩期～弥生時代中期における住居の変遷（岩瀬2001より引用）

し、東日本でもほぼ同時期に増加する現象は、広域な交流関係のなかで、すでに同じ住居構造を共有するということが相互交渉を通じて同期的に生じたと考えたほうがよいであろう。

その後、岩瀬が指摘するように条痕文系土器の東方への拡散とほぼ時期を同じくして、竪穴住居が増加し、さらに方形プランと対称構造の柱穴配置が中部から関東各地で見られるようになるが、これも以前から続く相互交渉の結果であろう。住居構造の基本的な部分では浮線文系の影響を受けつつ、東海地域で形成・変容した居住システムが、中部・関東に影響を与えたのであろう。新たな居住システムとは、集落自体がある程度それまでよりは固定的となり、竪穴住居の割合が増加するものである。このときに、岩瀬が指摘する置石炉のような住居内施設（岩瀬2001）を東海側から受容したのであろう。住居構造も細部で見れば修正が加わっていたようである。以上のように、晩期以来の系譜を引く浮線文系の住居構造は、中部関東の弥生初頭住居構造の祖型であり、浮線文期には東海地方にも影響を与えた。その後弥生時代前期以降東海で変容した住居構造が中部関東に拡散したと整理しておきたい。

以上、少々遠回りをしてきたが、今回報告となる上手沢遺跡例については、基本的に浮線文系である千網谷戸遺跡タイプの系譜を引き、東海地域との交渉を通じて修正されて形成された住居構造である可能性が非常に高いという評価を与えることができる。

おわりに

以上、浮線文段階から弥生時代中期初頭までの住居について検討してきた。その結果、中部高地から関東における初期の弥生住居の構造は、浮線文段階以降の伝統を受け継ぎつつ、弥生時代中期の典型的住居構造の基礎となっていることがわかった。そして、今回報告となる上手沢遺跡の住居は、こうした問題を考える上で重要な遺跡であることは明らかである。今後の類例の増加に期待したい。

本稿では、居住システム及び住居構造については、浮線文期の様相を重視したが、住居構造の系譜に関しては、縄文晩期前半期にまで遡って議論する必要もあり、さらに晩期後半にあっては、東海地方など周辺地域の影響も考慮しなければならない。このような住居をめぐる複雑で一筋縄ではいかない様相は、東日本における農耕社会の成立自体が、複雑性に富んだものであるということを反映しているものと理解する。

ところで、浮線文段階以降から弥生時代中期中葉までの期間は、再葬墓の時代であり、再葬墓を造営した集団の活動していた時代である。弥生時代中期中葉以降、南関東では、Ⅲ期の池上・中里期になると、再葬墓の造営中止と方形周溝墓の採用、墓域の村落への近接など、水稲農耕開始に伴って、それまでの再葬墓造営集団の集落構造は大きく変化した。おそらく中部から北関東では栗林Ⅰ式の成立に伴い、それが各地で影響を及ぼし、再葬墓造営集団にも変化を促したはずである。しかし、注意しなければならないのは、Ⅲ期中里期の住居構造は未だ「浅床住居」が主体であり、「深床住居」への転換は中期後半「宮ノ台式」以降であるということである。この転換の意味は、住居システム・住居構造上重要な画期であるが、今回の議論では、東日本における本格的な農耕社会成立期である、中期中葉以降の問題までは射程に入っていない[8]。今後は、複雑な地域間の関係を明らかにしていく上で、土器の研究とともに、住居に関する研究も進めて行かなければならない。

また、このような集落と住居の情報不足という現状にみられる、縄文時代から弥生時代への移行期における集落と住居の問題は、実は東日本だけの問題ではなく、西日本においても同様な問題となっている。石野と都出が指摘したような、農耕開始期以降の西日本から東日本への影響の問題を考える上でも、日本列島全体での検討が今こそ必要であろう。

（補記）

なお、本稿は平成15年度文部科学省科学研究費補助金若手研究（B）「再葬墓造営集団の居住システムと生業に関する研究」の成果の一部である。また、本稿作成にあたり、下記の諸先生・諸氏にご教示等をいただいた。記して感謝申し上げる。

石川日出志　井上慎也　大島慎一　及川良彦　櫛原功一　設楽博己　大工原豊

註

1）なお、本稿で時期について触れる場合は、具体的な型式名がわかる場合は、各々型式名を明示するが、大枠として以下の段階に区分する。Ⅰ期前半（浮線文期）、Ⅰ期後半（浮線文直後段階から苅谷原・柳坪段階）、Ⅱ期（中期前半）、Ⅲ期（中期中葉）。なお、ここでのⅠ期、

Ⅱ期という表記は、西日本における弥生土器編年をもとに設定されているⅠ期～Ⅴ期の5期細分に、在地土器型式を対応させたものである。なお、編年の大枠については、旧稿（小林1994）を参照されたい。

2）第3地点の調査では、遺構密度が極端に少なく、集落の北東側の範囲を限定することができた。

3）中野谷原遺跡については、調査を担当された安中市教育委員会の井上慎也氏にご教示いただいた。図3-1については、概報をもとに弥生時代後期と平安時代の住居のみを省いて筆者が作成した。

4）土坑は様々な形態のものがあるが、炭化種子の出土も見られ、特にトチの実を100個近く出土しているものがあり注目される。集落内での明確な貯蔵施設が居住遺構と併存する例として理解しておく。

5）上手沢遺跡の竪穴住居に関しては、櫛原功一氏より、今回の論文掲載にあたり基礎的情報を提供していただいた。

6）ただし、石野は「方型」住居群を渡来系集団の住居型式と考え、関東地方の縄文時代晩期後半（大洞C2式期）の「方型」住居群に農耕文化の影響を類推した。

7）弥生住居の対称構造の成立について、筆者は晩期の居住システムが大きく関係していると考える。縄文晩期には、基本的に掘立柱の平地式建物が主体となっており、中には、掘立柱にも関わらず、炉を挟んだ柱穴列からなる対称構造のものもあった。同時期に竪穴住居系は、浅床構造の平地建物化しており、掘立柱の平地式建物の住居構造である炉を挟んだ柱穴列からなる対称構造の伝統が、竪穴住居に採用された可能性がある。機能的には、煙出口を固定しつつ、長軸方向に容易に住居を拡張できる構造の利点が対称構造の採用された背景にあると推測する。

8）弥生時代中期中葉以降の住居については、大島慎一氏と渡辺外氏の検討（大島・渡辺2000）に詳しい。両氏は、弥生時代中期中葉段階において、形態でみた場合、利根川流域を中心とした関東地方北部では隅丸長方形から隅丸方形プランが中心で、南関東地方西部以西では隅丸方形に円形、楕円形が加わるという相違を指摘した。そして、巨視的にみれば、関東地方における弥生時代中期の竪穴住居は胴張り隅丸方形、小判形といった弥生時代後期に東海地方から関東地方にかけて一般的となるプランの源流となること、さらに住居プランについては、弥生時代中期中葉の多様なプランの中から当地域の系譜が出現するとした。本稿での結果は、両氏の指摘する弥生時代中期中葉における北関東の特徴である方形住居の系譜を明らかにしたことになる。一方、中部高地から南関東における円形や小判形住居の系統は、浮線文系では、北陸・東北地域に遡れるが、都出が指摘した弥生時代中期における北陸や西日本の影響も考慮する必要がある。小田原市中里遺跡や松本市境窪遺跡等の段階で、北陸や西日本の円形住居主体の伝統が影響を及ぼしている可能性も高い。また小判形については、浮線文系の対称な柱穴配置構造を継承しており、方形住居の長軸方向での柱穴数の増加による住居の長方形化の拡張を指向するなかで、短辺を丸める小判形が生まれた可能性もあろう。

引用・参考文献

荒川隆史　2000「青田遺跡」『遺跡が語る縄文社会』

荒川隆史　2001「新潟県」『亀ケ岡文化―集落とその実態―』晩期遺構集成Ⅱ、日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集青森県教育委員会

石坂茂・大工原豊2002「群馬県における縄文時代集落の諸段階」『列島における縄文時代集落の諸段階』

石野博信　1975「考古学からみた古代日本の住居」『家』社会思想社

石野博信　1990「第1章　古代日本の住居」『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館

伊藤友久他　1994『鶴前遺跡』、中央自動車長野線埋蔵文化財発掘調査報告書14、長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書17

井上慎也　2001『大上・原地区遺跡群―団体営農業基盤促進事業大上・原地区農道整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―』安中市教育委員会

井上慎也・小林青樹　2003『大上・原地区遺跡群―団体営農業基盤促進事業大上・原地区農道整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』安中市教育委員会（印刷中）

岩瀬彰利　2001「東海地方東部における条痕文期住居の様相―縄文と弥生の狭間に見られる住居2形態―」『三河考古』第14号

大島慎一・渡辺外　2000「第Ⅳ章第2節遺構の分析」『王子の台遺跡』第Ⅲ巻、東海大学校地内遺跡調査団

及川良彦　2002「住居と掘立柱建物（関東）」『静岡県における弥生時代集落の変遷』静岡県考古学会シンポジウム資料集

気賀沢進・小原晃一　1979『荒神沢遺跡』県営ほ場整備事業大田切（3）地区（昭和53年度分）埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第9集、駒ヶ根市教育委員会他

小林青樹　1994「第3節　縄文時代晩期終末の土器群について」『山梨県北巨摩郡長坂町健康村遺跡』新宿区民健康村遺跡調査団

駒ヶ根市教育委員会　1979『荒神沢遺跡緊急発掘調査報告書』

佐藤庄一　1995「亀ケ岡文化の集落」『縄文発信』岩手県立博物館

設楽博己・小林青樹　1993「関東地方における縄文晩期の西日本系土器と関連資料」『突帯文土器からと条痕文土器へ』第1回東海考古学フォーラム豊橋大会資料

篠崎健一郎　1989『小海戸』長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書、大町市教育委員

末木健他　1975『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-北巨摩郡長坂・明野・韮崎地内』山梨県教育委員会他

大工原豊・若狭徹　2001「注連引原遺跡群」『安中市史』第4巻、原始古代中世資料編

谷藤保彦他編　1997『神保植松遺跡』（財）群馬県埋蔵文化

財調査事業団調査報告第214集、関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第41集
茅野市教育委員会　1970『茅野和田遺跡』
都出比呂志　1985「弥生時代住居の東と西」『日本語・日本文化研究論集』大阪大学文学部
都出比呂志　1998「討論」『先史日本の住居とその変遷』同成社
津南町教育委員会　2000「上原Ａ遺跡」『津南町遺跡発掘調査概要報告書』
鳥羽嘉彦他　1989『五輪堂遺跡』塩尻東知久県営圃場整備事業埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書、塩尻市教育委員会
長岡市教育委員会　1998『中道遺跡』
長岡市教育委員会　1991『藤橋遺跡』
宮本長二郎　1998a「平地住居と竪穴住居の類型と変遷」『先史日本の住居とその変遷』同成社
宮本長二郎　1998b「討論」『先史日本の住居とその変遷』同成社
武藤康弘　2001「亀ケ岡文化の集落遺跡の構造」『亀ケ岡文化―集落とその実態―』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集
武藤雄六　1968「長野県富士見町籠畑遺跡の調査」『考古学集刊』第４巻第１号、東京考古学会
百瀬長秀　1994「浮線文期遺跡の分布論」『中部高地の考古学Ⅳ』